

「神々の饗宴」

—初稿—

2026/4/28

雨森 れに

〈人物表〉

桐生 玲奈
きりゆう れいな

(27) 高級食品会社の後継者

田幡 大智
たばた たいち

(55) 外食チェーン店の社長

桐生 雄仁
きりゆう ゆうじん

(60) 高級食品会社の社長。玲奈の父

1. 田幡の別荘・外観（夜）

海と山に囲まれた豪邸。近隣に民家や建物はない。照明が煌々と輝き、華やかな音楽が奏でられている。ドレスアップした桐生玲奈（27）、正面玄関に到着する。
S.P、玲奈を見て微笑み、扉を開ける。

2. 田幡の別荘・パーティー会場（夜）

立食パーティー中。豪華な食材が並び、著名人たちが歓談している。

玲奈、キャビアのカナッペを一口。

田幡大智（55）、玲奈にシャンパンを手渡す。

田幡 「あとで入らなくなるよ」

玲奈 「田幡さん、私の胃袋なめてますよね」

玲奈、いたずらっぽい笑み。

田幡 「さすが、雄仁さんの娘さんだよ。でも空腹が一番のスパイスって言うだろ？」

玲奈 「空腹にしなきゃいけないような食材なんです？」

田幡、面白げに息を漏らす。

田幡 「雄仁さんも報われるね」

玲奈 「自慢の娘をやらせてもらってますから」

玲奈、シャンパンを飲む。

3. 道（夜）

海沿いの道。

桐生雄仁（60）の車が数台の車に追われている。

雄仁の車が貿易港に入る。

4. 貿易港（夜）

雄仁の車が制御を失う。

車はそのまま海へ。

水中で揺らめくテールランプ。

5. 田幡の別荘・大食堂（夜）

大量のロウソクでライトアップされた薄暗い部屋。中央に大きな円卓がひとつ。それを囲むは日本の重鎮や著名人ばかり。ホールクロックが鳴る。

田幡 「遅くまでお待ちいただいて申し訳ない。『神々の饗宴』を始めましょうか」

一品目が提供される。

玲奈、皿を見る。キノコとチーズのピンチョス、それに小さい錠剤が添えられている。

田幡 「アミューズはヒカゲシビレタケです。舌を鋭敏にし、素晴らしい体験ができるでしょう。もし気分が悪くなったらその錠剤を」

玲奈、臆することなく口に運ぶ。味わい、笑む。そしてすぐに錠剤を飲む。

田幡、眉をあげる。

周囲は高揚感を覚えはじめ、感嘆を漏らす。

客人1 「早く次を！」

二品目が提供される。

魚のカルパッチョ。色を揃えて、虹のように並べられている。

参加者はキノコ作用で過剰な反応。

客人2 「次を持ってこい！」

三品目。

豪華に飾られたカモとフォアグラのパイ包み。

参加者、これにも舌鼓を打つ。

玲奈、淡々と食べ続けている。

田幡、SPより伝言を受け、頷く。

四品目。

ドライアイスの煙の中にガラスの小鉢。色とりどりの粒が見える。

田幡 「スープはすべてを識ると書いて、全識（ぜんしき）と名付けました。皆さんなら何かわかるかと」

玲奈、スプーンを口に運ぶ。考え込む仕草。

客人1 「青がウミガメの血、緑は野菜のポターージュ……黄色はフインガーライムか」

玲奈 「待って。この粒、どれも味が違う。色に意味は無いんじゃない？」

田幡、にやり。

客人2 「確かに二口めは味が違う。なのに調和が取れている」

玲奈 「田幡さん、これは素晴らしいですね。私、びっくりしました」

田幡 「なあに、ここからですよ」

五品目。

魚と貝の蒸し物。とても平凡なもの。

一同、啞然。

田幡 「あえて素朴にね。さ、どうぞ」

玲奈、一口食べて驚愕。

参加者も同様。震えだす者もいる。

玲奈 「この強烈なうまみは？」

田幡 「わが社の研究で生まれた掛け合わせの魚だよ。クエ、エツ、マハタなんかを組み合わせているね」

玲奈 「人体への影響なんかはないんです？」

田幡 「ない。けど、中毒性を計算するのがうちのやり方だね」

参加者、ガツガツと食べている。

田幡、満足げ。

六品目。

田幡 「こちらは、解体ほやほやのステーキです」

レアめに焼かれた分厚いステーキである。

玲奈 「美味しそう」

田幡 「雄仁さんが見たら悔しがらるだろうね」

玲奈 「お肉に目がないですからねえ」

田幡 「アイツは美食を突き通した。雄仁の肉は上質ですよ」

玲奈の手が止まる。

玲奈 「やだ。まるでこれが」

客人1 「うまい！ これは何の肉だ？」

客人2 「さっきの魚が霞むな」

客人1 「もっとよこせ！」

皿の割れる音。

玲奈、参加者たちを見る。

肉を取り合う争いが起こっている。

玲奈、田幡に視線を戻す。

田幡 「君が考えている通りだよ。玲奈ちゃん？」

玲奈、逃げ出そうと立ち上がる。

参加者のひとりが玲奈の皿を奪い取る。

真横で食られる。

玲奈、硬直。ただ見ているしかできない。

田幡 「ほら、座って」

玲奈、ゆっくりと着席。

田幡 「玲奈ちゃん、家族にならないか。うちの息子が18になるんだ。意味、わかるよね？」

玲奈 「何が目的……」

田幡 「君は早く社長になりたい。僕は会社を大きくしたい。それ以下でも以上でもないよ」

部屋にワゴンが入ってくる。人ほどの大きさの皿にステーキがこんもりと並べられている。

参加者が盛り上がる。

次々とはけていくステーキ。

肉がなくなった場所から人骨が覗く。

玲奈 「ああ……」

田幡 「君のどこの貿易ノウハウと、僕のどこの研究室。提携するのにいいと思わないかい」

玲奈、喉を鳴らす。

田幡 「ああ、息子は適当な役職につけておけばいい。反抗しない掛け合わせだから大丈夫だよ」

玲奈 「田幡さんのところも？」

田幡 「経営者らしいだろ。用途に合わせて掛け合わせを作る」

玲奈、自分の唇を触る。

田幡、微笑む。

田幡 「君の舌、そして野心が必要なんだよ」

玲奈の前に新しいステーキが到着する。

分厚いステーキの隣に指輪のはまった薬指が添えら

れている。中年男性の太い指である。

玲奈、指輪を自分の薬指はめる。ぶかぶかである。

玲奈 「そうですね。よく考えれば、いい話ですね」

手をかぎし、指輪を眺める。

ロウソクの光が反射しキラキラとしている。

目を細め、うっとり。

玲奈 「母も、処理できますよね？」

田幡 「もうひとつの指輪も、間もなく到着するよ」

玲奈 「仕事が早いですね」

田幡 「でも、できれば君は食べたくないねえ」

玲奈、につこり。

カラトリーを持ち、肉を切り分ける。

一口で頬張れるギリギリの大きさである。

見せつけるように口に入れる。

力強く咀嚼し、飲み込む。

玲奈 「おいしい。今まで食べたもの、どれよりも」

田幡、満足げに頷く。

田幡 「おかわりは？」

玲奈 「ぜひ」

玲奈と田幡は食事をつづける。

周囲は美食に溺れ、幻覚を楽しむ参加者ばかり。

おわり